



一般社団法人日本生態学会

No.44

2018年1月

ニュースレター

[目次]

第15回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム参加報告 1

記事

I. 次々期会長および次期代議員選挙結果 4

II. 学会各賞受賞者決定 4

III. 寄附金等取扱規程新設 4

IV. 規則の改訂について 5

V. 書評依頼図書 5

VI. 寄贈図書 6

VII. 地区会報告 6

書評 14

京大大学生態学研究センターニュース 18

第15回 男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに参加して

別宮有紀子、曾我昌史、三宅恵子、水野晃子

2017年10月14日(土)、東京大学本郷キャンパスにおいて、第15回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「ダイバーシティ推進における産学の取り組み」が開催された。日本生態学会は正式加盟学会として2007年度から本シンポジウムに毎年参加している。今回は、第4回大規模アンケートの解析結果の報告と、理工系のアカデミアや産業界における男女共同参画推進のための課題や事例、先進的な取組などが紹介され、男女共同参画のあるべき姿や方向性が確認・共有された。日本生態学会からは可知会長およびキャリア支援専門委員会から別宮、三宅、水野、曾我が参加した。なお、日本生態学会では2016年度から、会員に対して本シンポジウムの参加費と交通費を支援している*1。



◆午前の部「第4回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査報告」

まず、大規模アンケート調査の目的・意義について、日本遺伝学会の大坪久子氏より説明がなされた。過去3回のアンケート調査では、回答数14000～19000という膨大なエビデンスデータに基づいて、提言・要望書が作成され、国の男女共同参画や科学技術関連の白書や基本計画中に、具体的目標として明記されてきた。国の政策や各種支援事業(RPD制度、女子中高生理系進路選択事業、競争的資金における女性研究者等支援、戦略的創造研究推進事業等)に本アンケートが与えてきた影響は多大であり、この活動に従事されてきた諸先輩方の苦勞と努力と情熱を考えると、改めて感謝と尊敬の念を持った。

次に、第4回アンケート調査の結果の概要の報告が、日本建築学会の阪東美智子氏からあった。アンケート実施期間は2016年10月8日～11月7日で、回答数は18159件(男性13162人、女性4997人)であった。ちなみに日本生態学会の回答数は611で、前回の第3回アンケート調査の972より少なかった。アンケート報告書の内容は膨大で多岐にわたるので、ここでは特に印象に残ったことに限り報告する。詳細は連絡会HPを参照されたし(<http://www.djrenrakukai.org/enquete.html#enq2016>)。

今回の報告で特に印象的だったのは、企業と大学における雇用形態の差と、年収の男女差であった。企業では年齢を問わずほとんどが任期なし職であったが、大学等の研究機関では男女ともに35歳までは任期付きの職が多く、所属変更も多かった。また女性の方が任期付職の割合・継続期間が多く、40歳以上の任期付職の女性は4

割を超えていた。つまり企業の方が身分が安定しているのに対して、大学等研究機関で働く若い研究者は身分が非常に不安定で、特に女性はその期間が長期化しているということだ。また、役職や年収にも男女差があり、同じ役職につくまでに女性は10歳の遅れがあること、全ての年齢層で女性の年収が男性の8割と低いことが示された。これは女性に能力がないのではなく、家族の転勤に伴う所属の変更や、育児・介護等によって研究が遅れがちなこと、そのため同年代の男性に比べると業績が少ない傾向にあること、女性の方が任期付職の割合が多いことを反映しているのだろう。また研究室の主催者や管理職に昇進することを女性がためらう傾向にあることも影響しているかもしれない。

次いで日本農芸化学会の裏出令子氏から自由記述回答の紹介があった。自由記述欄に多く見られた回答は、ワーク・ライフ・バランス(1100件)、数値目標(1443件)に関するものが多かった。ポスドク(270件)、キャリアパス(565件)に関する意見も多く、これらの問題が未だ十分に解決されていない現状を示している。ポスドクについての回答からは、定職でないため男女ともに将来設計がたてにくい、配偶者と別居となる確率が高い、ポスドクだと子どもが認可保育園に入れない、公募の年齢制限が出産・育児による研究を中断した女性研究者の復帰を妨げている等の意見が目立った。これらの任期付研究職の内在的問題を改善していかないと日本の研究界の若い研究者が枯渇するだろうという裏出氏の危機感には深く同意する。

個人的には第15期委員長の北川尚美氏が冒頭の挨拶の中で述べられた「性別に関わらず研究をしたい人が研究を続けられる社会へ」という言葉が心に残った。そのため何ができるのか、私たち一人ひとりが自分のこととして考えなくてはならない。

(別宮有紀子)

*1: 興味のある方、参加を希望する方は、キャリア支援専門委員会(careersupport@mail.esj.ne.jp)へお問い合わせください。

◆昼の部 ポスターセッション

24の学会と24大学・研究機関・企業により男女共同参画の取り組みについてポスター発表があった。それぞれの学会が個性的な取り組みを実施して印象的であった。多数の学会が共通して取り組んでいた男女共同参画支援策としては、(1)学会期間中の保育サービスの提供、(2)女子中高生を対象とした夏の学校の開催、(3)女性研究者ネットワークの充実等が挙げられる。生態学会として参考になりそうな取り組みとしては以下のよう

なものが挙げられる。
日本高分子学会：女性研究者と女子学生の交流会
日本生理学会：女性研究者を対象とした学会賞の創設(毎年約10名が応募しているという)
日本獣医学会：女性獣医応援ポータルサイトの充実・活用
日本地盤工学会：女性研究者の会員費減免措置(約500名が利用しているという)
日本農芸化学会：学会期間中の託児所の無料化
これらの取り組みは各学協会でも大変好評で、今後も継続して行う予定だという。今後、日本生態学会でも、取り組み可能なものがあれば積極的に取り入れていただければと思う。

(曾我昌史)

◆午後の部「真の技術革新を目指したダイバーシティ」 第I部

開会の辞、来賓挨拶の後、二つの基調講演が行われた。一つ目は、経済産業省の小田文子氏による「ダイバーシティ2.0 一歩先の競争戦略へ」の講演であった。経済産業省は、昨年8月に「競争戦略としてのダイバーシティ経営(ダイバーシティ2.0)の在り方に関する検討会」を立ち上げ、今年3月に、企業が取るべき実践方法として「ダイバーシティ2.0行動ガイドライン」を公表したが、本講演ではダイバーシティ経営の推進についての現状や、ダイバーシティ2.0の概要及びガイドラインの詳細について紹介されていた。日本の場合、多くの企業がダイバーシティの促進を「利益」ではなく「コスト」と捉えているため、根本的な意識改革が必要であるという内容が印象的であった。具体的なガイドラインの中身については、(1)経営戦略への組み込み、(2)推進体制の構築、(3)ガバナンスの改革、(4)全社的な環境・ルールの整備、(5)管理職の行動・意識改革、(6)従業員の行動・意識改革、(7)労働市場・資本市場への情報開示と対話の7つが挙げられていた。二つ目の講演は、科学技術振興機構の渡辺美代子氏による「受け入れるダイバーシティから発信するダイバーシティへ ジェンダーサミット10発アジアから世界へ」の講演であった。講演の主な内容としては、今年5月に一橋大学で行われたジェンダーサミットの内容報告であった。これまでダイバーシティの議論は、ヨーロッパから世界に発信されていく構図であったが、今後はアジアで起きている問題やアジアでの知見を世界へと発信させるような流れにする必要があるという主張が印象的であった。

(曾我昌史)

第II部

第二部の前半では、産学からの取組発表があった。まず主催学会の化学工学会の宮崎あかね氏(日本女子大学教授)より、各種データに基づくダイバーシティ推進における産学の現状について概要説明があった。その後、学からの報告として東村博子氏(名古屋大学副理事)が研究者一人当たりの執筆論文数の男女比較のデータを示し、他国と比べ日本では女性の方が多いことから日本では頑張っていないと研究者として生き残れないのではないかとの見方を示し、普通のやり方でロールモデルになれる人が必要と述べられた。名古屋大学ではトップダウンによる総長管理定員を使った女性PI枠の採用がうまく機能しているなどの報告があった。続く学からの報告として、國井秀子氏(芝浦工業大学教授)が企業と大学を比較し、企業は最終目的の達成を重要視するが、大学は計画の遂行が主眼となっていて成果が出ていないとの指摘があった。今後は、社会ニーズへの対応として工学系女性育成が重要であり、技術同友会等からの提言を元に産学連携のもとで女性活躍のエコシステムの構築が必要と述べられた。次に産業界からの講演として、岩田喜美枝氏(21世紀職業財団会長)が、女性の活躍促進には、仕事の継続とキャリアアップで重要であり、それを実現するためには、長時間労働の是正とともに、女性部下の育成方針の見直しや、難しい仕事にもチャレンジする女性自身の意識改革の必要と述べられた。最後に、星野朝子氏(日産自動車専務執行役員)が、日産自動車のダイバーシティ改革について、女性活躍の母体としての専門オフィスを立ち上げて商品開発・工場のライン・販売の現場に女性を積極的に入れ、女性の視点を活かしたことで業績向上を果たしたことや、女性管理職割合を10%にした経緯などについて述べられた。

(三宅恵子)

第二部の後半では、パネリストとして第二部の講演者である宮崎氏、東村氏、國井氏、岩田氏、星野氏に、総合科学技術・イノベーション会議常勤議員である原山優子氏が加わり、辻氏のファシリテーションのもとでパネル討論が行われた。原山氏の自己紹介の後、理工系の女性割合を高めるにあたっての二つのテーマについて言及があった。一つはシーズ問題(理工系を目指す女子学生進学率の段階的低下)、もう一つは、卒業後のライフイベントとキャリア形成の両立の問題だ。シーズの問題としては、現状では、工学系の博士課程に入る女子学生は多くが外国人であり、卒業後は帰国するケースが多いこと、女性は生物学には興味があるが、工学系の女子学生が少なく、ニーズとシーズの不一致について触れられた。「リケジョ」という大まかな枠では産業界が欲している分野の女子学生は増えないことなどが課題として挙げられ、産学連携の必要性が強調された。理工系女性の継続とキャリアアップの対策について、大学の側からは、研究員までは女性が多いがPIになる女性研究者が少なく、現在のアカデミアコミュニティのモノカルチャー化は改善されていないこと、キャリアアップには貢献をアピールしてくれる人が必要であるが、そのための人

脈が女性には少ないために良い研究をしてもステップアップできないことが触れられた（東村氏・國井氏）。産業界でも、育成のプロセスで仕事のアサインメントに男女差があることで（出産育児に気を遣いすぎる）、結果として男女にキャリアで差が出来てしまう現状が述べられた（岩田氏・星野氏）。同時に、雇用体系そのものがフレキシブルになっているため一つの場所にこだわる必要もない、という意見が出された（原山氏）。フロアから、「男性と同じように仕事をしないと評価されない」ということでは、ダイバーシティからの働き方のイノベ

ーションはないのではないか？という意見が出された。國井氏から、育児休職や短時間勤務を男性が取ることを許可したら部署の雰囲気の変化した経験が述べられ、「女性だけに目を向けていると文化が変わらない」という意見も出された。東村氏からアカデミアでは「男性の3倍働けば教授になれる」と女性PIが言ってしまうような現状への警告もあった。男性の中にも介護問題などダイバーシティがあること、自分が持っている「常識」に気付くことの重要性が強調された。

（水野晃子）

お知らせ

このたび男女共同参画学協会連絡会では、無意識のバイアス（Unconscious Bias）の啓発パンフレットを作成しました。学会員の皆さまの職場や関係諸機関に配布していただくと幸いです。パンフレットは以下のリンクから無料でダウンロードできます。また印刷されたパンフレットは生態学会札幌大会のキャリア支援ブースで配布予定です。

無意識のバイアス—Unconscious Bias—を知っていますか？

「無意識のバイアス—Unconscious Bias—」とは、誰もが潜在的に持っているバイアス（偏見）のことです。育つ環境や所属する集団のなかで知らず知らずのうちに脳にきざみこまれ、既成概念、固定観念となっていく。バイアスの対象は、男女、人種、貧富などと様々ですが、自覚できないために自制することも難しいのです。無意識のバイアスは色々な判断をする過程において便利なショートカットの役割を果たします。特に、採用や昇進人事の場では、無意識のうちに「バイアス」が働き得ることが示されています。それでも、私たちは「無意識のバイアス」がいつ、どのように現われるかを知ることで「評価や判断」にあたってその影響を最小限に抑えることが可能です。

http://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2017/UnconsciousBias_leaflet.pdf

記 事

I. 次々期会長候補及び次期代議員選挙結果について

2017年10月31日に投票を締め切り、11月2日に日本生態学会事務局において開票を行った結果、次々期会長候補および次期代議員は下記のように決定いたしました。

日本生態学会選挙管理委員会
委員長 半場 祐子

総投票数 530 票 (投票率 13.69%)

1. 会長候補 (任期 2020 年 3 月～2022 年 3 月)

選出	湯本 貴和	119 票
次点	宮下 直	113 票
	河田 雅圭	95 票
	中村 太士	87 票
	日浦 勉	56 票
	その他 35 名 (合計)	52 票

2. 代議員 (任期: 2017 年 12 月～2019 年 12 月)

1) 全国選出の代議員 (15 名): 同得票数の場合は年少者を優先します。次点者および同得票数獲得者までを示しました。

	順位	氏 名	所属地区会	得票数
選出	1	佐竹 暁子	九州	78
選出	2	工藤 岳	北海道	61
選出	3	相場 慎一郎	九州	49
選出	4	陶山 佳久	東北	44
選出	4	粕谷 英一	九州	44
選出	6	西廣 淳	関東	42
選出	7	瀧本 岳	関東	39
選出	7	東樹 宏和	近畿	39
選出	9	五箇 公一	関東	38
選出	9	中野 伸一	近畿	38
選出	11	巖佐 庸	九州	36
選出	12	内海 俊介	北海道	34
選出	13	大澤 剛士	関東	33
選出	13	川北 篤	近畿	33
選出	15	占部 城太郎	東北	32
次点	16	松浦 健二	近畿	31

2) 地区選出の代議員 (7 名): 選出・次点ともに、全国選出でも選出された場合は全国選出を優先し、同得票数の場合は年少者を優先します (*). () 内は得票数で、次点者および同得票数獲得者まで示しました。

北海道	選出: <u>岸田 治(18)</u> 次点: 小泉 逸郎(13)
東北	選出: <u>鈴木 まほろ(10)</u> 次点: 彦坂 幸毅(6)* (全国) 陶山 佳久(6)* 松政 正俊(6)*
関東	(全国) 瀧本 岳(13) (全国) 西廣 淳(11) 選出: <u>赤坂 宗光(9)*</u>

次点: 森 章(9)* (全国) 大澤 剛士(9)*
鈴木 牧(9)*

中部	選出: <u>北村 俊平(7)*</u> 次点: 崎尾 均(7)*
近畿	選出: <u>丑丸 敦史(14)</u> 次点: <u>松浦 健二(9)*</u> (全国) 川北 篤(9)*
中国四国	選出: <u>宮竹 貴久(7)*</u> 次点: 鎌田 磨人(7)*
九州	(全国) 粕谷 英一(15) (全国) 佐竹 暁子(14) (全国) 相場 慎一郎(8) 選出: <u>矢原 徹一(7)</u> 次点: 細川 貴弘(6)* 榎木 勉(6)*

II. 学会各賞受賞者決定

- 第 16 回日本生態学会賞
大串 隆之 (京都大学名誉教授)
- 第 16 回日本生態学会功労賞
巖佐 庸 (九州大学大学院理学研究院)
菊沢 喜八郎 (京都大学・石川県立大学名誉教授)
矢原 徹一 (九州大学大学院理学研究院)
- 第 22 回日本生態学会宮地賞
潮 雅之 (科学技術振興機構/京都大学生態学研究センター)
小林 真 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)
鈴木 俊貴 (京大学生態学研究センター)
- 第 11 回日本生態学会大島賞
大園 享司 (同志社大学理工学部環境システム学科)
- 第 6 回日本生態学会奨励賞 (鈴木賞)
佐橋 玄記 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
曾我 昌史 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
角田 智詞 (German Centre for Integrative Biodiversity Research (iDiv) Halle-Jena-Leipzig)

III. 寄附金等取扱規程新設

2017 年 12 月 16 日に平成 29 年度第 3 回理事会が行われ、以下の寄附金等取扱規程の新設が承認された。

一般社団法人 日本生態学会 寄附金等取扱規程 (目的)

第 1 条 この規程は一般社団法人日本生態学会(以下「当法人」という)が受領する寄附金に関し、必要な事項を定めるものとする。

(定 義)

第 2 条 この規程において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

- ①一般寄附金 個人または非営利団体が使途を特定せずに寄附した寄附金
- ②使途特定寄附金 使途をあらかじめ特定して公募し、それに応じて個人または非営利団体が寄附した寄附金
- ③特別寄附金 個人または非営利団体が使途を特定して寄附した寄附金

(受入基準)

第 3 条 当法人は、寄附金等が次の各号に掲げる基準の

いずれかに該当するときは、その寄附金等を受け入れることができないものとする。

(1) 寄附金等の受け入れにおいて、次に掲げる条件等が附されているとき

イ 寄附者に寄附の対価として何らかの利益または便宜を供与すること

ロ 寄附者が寄附の経理について監査を行うこと

ハ 寄附後に寄附者が寄附の全部または一部を取り消すことができること

ニ 寄附された寄附金等を寄附者に無償で譲渡または使用させること

ホ その他代表理事が当法人の運営上支障があると認める条件

(2) 寄附金等を受け入れることにより、当法人の業務、財政、または名誉に負担または支障が生じると認められるとき、その他寄附金等が定款第3条に定める目的の達成に資するものでないと判断される時

(受入手続き)

第4条 寄附金等を当法人に寄附しようとする者は、様式1による書面で寄附金の申し込みを行う。

2 当法人は、前項により寄附金の申込を受理したときは、庶務担当理事により第3条の基準に該当しないことを確認のうえ受入れの可否を決定し、理事会へ報告する。

3 様式1において、寄附金等を当法人に寄附しようとする者が特定の用途を指定した場合についてはその目的を有する特別会計に、用途を特定しない場合は一般会計に繰り入れるものとする。

4 寄附金等の受け入れが決定したときは、寄附者に対しその旨を通知する。

(受領書等の送付)

第5条 一般寄附金、用途特定寄附金または特別寄附金を受領したときは、礼状、受領書を寄附者に送付するものとする。

2 前項の受領書には、当法人の事業に関連する寄附金である旨、寄附金額及びその受領年月日を記載するものとする。

(寄附金に係る結果の報告)

第6条 当法人は、寄附者の求めに応じて寄附金総額、用途予定その他必要な事項を記載する報告書を寄附者に交付するものとする。ただし、ニュースレター等への公開をもってこれに代えることができるものとする。

2 当法人は、寄附者の求めに応じて当該寄附金の収支に係る計算書及び当該支出による効果などを記載した報告書を寄附者に交付するものとする。ただし、ニュースレター等への公開をもってこれに代えることができるものとする。

(その他)

第7条 本規定に定めるもののほか、寄附金の取扱いに関して必要な事項は代表理事が別に定めることができる。

(改 廃)

第8条 この規程の改廃は、理事会の議決を経て行うも

のとする。

附 則

1 この規程は、平成29年12月16日から施行する。
(※ 様式1(寄附金申込書)はウェブサイトからダウンロードできます。)

IV. 規則の改訂について

2017年12月16日に平成29年度第3回理事会が行われ、以下の規則改定案が承認された(改訂部分のみ抜粋)。

1. 一般社団法人日本生態学会 日本生態学会宮地賞規則

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

2. 一般社団法人日本生態学会 日本生態学会大島賞規則

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

3. 一般社団法人日本生態学会 日本生態学会奨励賞(鈴木賞)規則

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および鈴木賞準備金より賞金5万円を贈呈する。

V. 書評依頼図書(2017年5月~2017年12月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局(office@mail.esj.ne.jp)までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

- 辻大和・中川尚史編「日本のサル 哺乳類学としてのニホンザル研究」(2017) 332pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060233-4
- 増田隆一著「哺乳類の生物地理学」(2017) 190pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060252-5
- 高橋清孝編著「よみがえる魚たち」(2017) 196pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1607-9
- 難波成任著「創造する破壊者ファイトプラズマ 生命を繰る謎の細菌」(2017) 400pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-066139-3
- 松井明著「ダム建設、水田整備と水生生物」(2017) 150pp. 東京図書出版 ISBN:978-4-86641-067-8
- 林良嗣・乗原淳著「道路建設とステークホルダー合意形成の記録」(2017) 144pp. 明石書店 ISBN:978-4-75034486-7
- 山崎晃司著「ツキノワグマ すぐそこにいる野生動物」(2017) 278pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063348-2
- 梶光一・飯島勇人編「日本のシカ 増えすぎた個体群の科学と管理」(2017) 264pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060234-1
- 鷲谷いづみ著「大学1年生の なっとく!生態学」

- (2017) 175pp. 講談社 ISBN:978-4-06-153897-9
10. 小池洋一・田村梨花編「抵抗と創造の森アマゾン 持続的な開発と民衆の運動」(2017) 336pp. 現代企画室 ISBN:978-4-7738-1722-5
11. 和田恵次著「汽水域に生きる巻貝たち その生態研究史と保全」(2018) 146pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-02167-4

VI. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.96, No.97」(2017) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「第41回 鹿島学術振興財団2016年度年報」(2017) 364pp. 公益財団法人鹿島学術振興財団
3. 「財団法人下中記念財団2017年報」(2017) 108pp. 公益財団法人下中記念財団
4. 「第33回京都賞記念ワークショップ基礎科学部門『植物の生き方を知り地球環境の変化を予測する』」(2017) 40pp. 公益財団法人稲盛財団
5. 「第40回公益財団法人山田科学振興財団 事業報告書」(2017) 156pp. 公益財団法人山田科学振興財団

VII. 地区会報告

北海道地区会

2016年度地区会報告(2016年4月1日～2017年3月31日)

- (1) 地区会 HP の刷新
2016年12月20日の役員会にて地区会の新しいHP (<https://www.esj-hokkaido.org/>) の公開を決定した。
- (2) ESJ65 実行委員会を組織化
2016年12月20日の役員会にて、ESJ65 の実行委員会の各種業務担当者を決定した。
- (3) 2016年度(平成28年度)北海道地区会大会の開催日時: 2017年3月3日(金) 9:25～17:20
場所: 北海道大学 環境科学院 / 地球環境科学研究院 講義室 D201
参加者: 78名

【若手の部】

「自然河川における環境DNAメソッドを用いたサケ科魚類および冷水病原菌 *Flavobacterium psychrophilum* の生態学的研究」本多託也(北大・農学院)・水野伸也(さけます内水試)・荒木仁志(北大・農学研究院)

「阿寒湖のマリモの繁殖 - 遊走細胞に注目して -」梅川健人(北大・理)・若菜勇(釧路市教委・マリモ研)・大原雅(北大・環境科学院)

「Web上の写真から繁殖形質の地域変異を探る」渥美圭佑・小泉逸郎(北大・環境科学院)

「高オゾン濃度環境下におけるシラカンバのBVOC放出」増井昇(北大・農学部)・望月智貴・谷晃(静岡県大・食品栄養科学)・小池孝良(北大・農学研究院)

「一回繁殖型多年生植物オオウバユリの集団間変異」大嶋希美・早船琢磨・大原雅(北大・環境科学院)

「都市-農地景観においてサケ残滓の腐食機能は腐食性脊椎動物を介して変化するか?」玉田祐介・赤坂卓美・柳川久(帯広畜産大学)

「Toxic impact of alien prey depends on foraging ecology of native predators」Evangelia Kazila(北大・環境科学院)・Osamu Kishida(北大・北方圏FSC)

「オゾン暴露に対するトドマツの生理成長応答～ニホンカラマツとの比較から」菅井徹人(北大・農学院)・北尾光俊(森林総研・北海道支所)・来田和人(道総研・林試)・渡部敏裕・小池孝良(北大・農学院)

「近縁な野ネズミ2種の糞中DNAを利用した食性解析とその種間比較」井上結太(北大・農学部)・齊藤隆(北大・北方圏FSC)・島田卓哉(森林総研)・神戸崇・荒木仁志(北大・農学研究院)

「ゴマシジミとナガボノシロワレモコウの共生関係 - 花穂の切除実験による補償効果の検証 -」内田葉子(北大・環境科学院)・北広島森の倶楽部ゴマシジミ研究部・大原雅(北大・環境科学院)

「マイクロサテライト解析を用いた豊平川におけるサケ (*Oncorhynchus keta*) の遡上前期群と後期群の遺伝的差異の研究」河合駿(北大・農学院)・佐藤俊平・森田健太郎(北水研)・荒木仁志(北大・農学研究院)

「エゾヤチネズミのnDNAとmtDNAによる異なる遺伝的集団構造パターンの生成要因の検証」村上翔大(北大・環境科学院)

「日本産エンレイソウ属植物の分化と繁殖 - 白い花弁を持つ種に着目して -」相田大輔(北大・理)・大原雅(北大・環境科学院)

「牧場の糞を巡る生物たちの関係」佐藤愛記・福井翔太(稚内高校・科学部)・磯清志(稚内高校・科学部・顧問)

【一般の部】

「感染症と生物毒の中毒とは異なる - 保全生態学的戦術立案の前提として両者峻別が必須」浅川満彦(酪農大・獣医学群/野生動物医学センター)

「雌雄異株植物マユミでみられる花粉制限と資源制限」紺野康夫・坂下裕樹(帯畜大)

「石狩海岸の砂丘植生について」佐藤謙・堀内剛・福原将・斎藤智康(北海学園大・工学部)

「釧路湿原温根内の湿原植生にみられた7年間の変化」佐藤雅俊(帯畜大・畜産生命科学)・野原精一(国環研・生態環境センター)

「若手の部」では14件、「一般の部」で4件の研究発表が行われた。

「若手の部」発表者の中から相田大輔(北大・理)、内田葉子(北大・環境科学)、Evangelia Kazila(北大・環境科学)の3名に若手研究奨励賞を授与し、賞状と副賞を贈呈した。また、稚内高等学校科学部に「若葉賞」を授与した。

- (4) 2016年度(平成28年度)北海道地区会 総会の開催日時: 2017年3月3日(金) 13:00～13:30

場所: 北海道大学 環境科学院 地球環境科学研究院 講義室 D201

会計報告がなされ、了承された。

地区会費の廃止と今後の方針(3年後をめどに地区配当金の増額を要請)が了承された

ESJ65・札幌大会の運営体制の報告がなされた

自然保護委員会より石狩海岸の風車建設に関する報告がなされた

東北地区会

2017年活動報告

(1) 東北地区会第62回大会を開催

【公開シンポジウム】

「原発事故が福島の野生生物にもたらしたことーその回復過程と今後の課題ー」

開催日：2017年11月4日

会場：福島大学共生システム理工学類

「放射線がアカネズミにもたらす影響ー細胞レベルの評価から生態レベルへ」石庭寛子（福島大・環境放射能研）

「厳罰事故に伴う魚類の放射能汚染：海水魚と淡水魚の比較」和田敏裕（福島大・環境放射能研）

「福島第一原子力発電所事故後に生じたブタからニホンイノシシ個体群への遺伝子導入」藤間理央・兼子伸吾（福島大・共生システム理工）

【一般講演】

開催日：2017年11月3～4日

会場：福島大学共生システム理工学類

オープニング講演

「消えた植物、残った植物、増えた植物ー東日本大震災による津波と地盤沈下による生物多様性の変化ー」黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

研究口頭発表

「東日本大震災が沿岸域の植生に与えた影響」曲淵詩織・江田至・黒沢高秀（福島大）

「カラスシキミの繁殖生態」坂田ゆず（秋田県大）・中濱直之（東大）・山崎理正（京大）

「ミトコンドリアDNA解析によって明らかになった日本産 *Microbisium* 属カニムシにおける複数の未記載種」佐藤浩一（福島大）・大平創（福島大）・塘忠顕（福島大）・Leanne Faulks（筑波大）・兼子伸吾（福島大）

「光：栄養塩バランスと生態ピラミッドー野外実験池における光操作実験」風間健宏（東北大）・時田紘太郎（東北大）・Xuwang Yin（大連海洋大）・土居幸幸（兵庫県大）・片野泉（奈良女大）・山道真人（東大）・吉田丈人（東大）・Nelson G. Hairston（コーネル大）・占部城太郎（東北大）

「砂防堰堤スリット化後の渓流域におけるサクラマス産卵行動と産卵場選択の特徴ー山形県早田川を事例としてー」大場梢・渡邊一哉（山形大）

「東日本大震災における津波で攪乱された東北沿岸域の干潟ベントス群集」柚原剛（東北大）・鈴木孝男（みちのくベントス研）・占部城太郎（東北大）

ポスター研究発表

「苧安の茅場の植生と保全」薄井創太・黒沢高秀（福島大）

「落葉高木の葉形質は個体サイズで異なるのか？ーブナとハウチワカエデを対象とした検証ー」大野美涼・山尾僚（弘前大）

「サイズの異なる底生性ミジンコの被食回避行動」山田紗友美・占部城太郎（東北大）

ポスター研究相談

「一年生完全寄生植物ナンバンギセル（ハマウツボ科）の寄主利用様式に関する研究」齋藤佑樹（福島大）・末次健司（神戸大）・黒沢高秀（福島大）

「仙台湾東谷地干潟における魚類・エビ類群集の空間構造」村上純一・柚原剛・占部城太郎（東北大）

(2) 地区委員会報告

2017年度定例地区委員会は、2017年11月3日に福島大学において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は次の8名であった。陶山佳久（地区委員長）・杉山修一・鈴木まほろ・占部城太郎・兼子伸吾・黒沢高秀・牧野能士（会計幹事）・牧野渡（庶務幹事）

<報告事項>

・庶務報告

- 1) 2017年1月8日：イベント後援 → 岩手県立博物館・岩手県文化振興事業団【大津波と三陸の生き物】第2回「大津波と三陸の海と河口の動物たち」
- 2) 2017年1月22日：イベント後援 → 岩手県立博物館・岩手県文化振興事業団【大津波と三陸の生き物】第3回「岩手県の砂浜の現状と海浜植物の保全対策」
- 3) 2017年2月19日：日本生態学会東北地区会会報77号を発行・メール配信（地区会事務局）
- 4) 2017年6月19日～7月7日：東北地区会臨時メール総会にて、地区会費を当面0円に変更することと、これに伴う地区会則改正案を可決（地区会会則の改正は同年7月11日付）
- 5) 2017年7月2日：イベント共催 → 岩手生態学ネットワーク【岩手発・市民講座「人と自然と生態学」】第16回「大きな森を枯らす小さな虫の話」
- 6) 2017年9月22日：第62回地区大会及び総会の案内をメール送信（福島県）
- 7) 2017年10月17日：第62回地区大会のプログラムをメール送信（福島県）
- 8) 2017年10月29日：第62回地区大会の要旨集をメール送信（福島県）
- 9) 2017年11月3-4日：第62回地区大会福島大会（於・福島大学）、定例地区委員会および地区大会総会を開催
- 10) 2017年12月23日：イベント後援（予定） → 岩手生態学ネットワーク【岩手発・市民講座「人と自然と生態学」】第17回「沿岸の震災復興と生き物たち：人と自然のつながりを考える」

・会計報告

牧野会計幹事より、2016年度決算と会計監査について報告があり、了承された。

・岩手生態学ネットワーク報告

鈴木委員より、2017年度の活動報告と会計報告がなされ、了承された。また2018年度も同ネットワークへの支援を希望する旨、発言があり、これについては審議事項となった（後述）。

<審議事項>

- ・2018年地区委員選挙 選挙管理委員の推薦
陶山委員長より饗庭正寛氏(東北大)と小口理一氏(東北大)が推薦され、承認された。
 - ・次期自然保護専門委員の推薦
陶山委員長より、現職の星崎和彦氏(秋田県立大)と黒沢高秀氏(福島大)の留任が提案され、承認された。
 - ・岩手生態学ネットワーク2018年度支援
鈴木委員より、50,000円の「支援費」の要望があり、審議の結果、承認された。
 - ・2017年度予算執行状況および2018年度予算案
牧野会計幹事より、2017年度予算執行状況について説明がなされた。地区大会開催にあたり福島大学から助成金が得られたため、地区会予算からの経費執行が例年よりも著しく少なかったことを含めて、了承された。次いで、2018年度予算案について説明がなされ、地区会費廃止後の収入名目「地区会活動費」を200,000円へ変更し、地区大会援助には従来どおりの150,000円を計上し、また前述の「支援費」50,000円を計上するなどの修正案が、審議の結果、承認された(地区大会総会にて承認)。
 - ・次回、次々回地区大会開催地
次回大会を青森県で開催することが、昨年度地区委員会の決定事項に基づいて了承された。また次々回大会は岩手県へお願いし、鈴木委員から承諾を得た(地区大会総会で追認)。
- (3) 地区大会総会報告
- 2017年度東北地区会総会は、2017年11月4日に福島大学において開催され、総会議長に黒沢高秀氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。
- ・地区委員会における庶務報告および会計報告が了承された。
 - ・岩手生態学ネットワークの活動について報告がなされた。
 - ・2017年度予算案が原案どおり承認された。
 - ・次回地区大会を青森県で行うこと、次々回大会は岩手県に願うことが了承された。

関東地区会

2017年(1月～12月)活動報告

- (1) 2017年2月11日に東京大学大学院農学生命科学研究科フードサイエンス棟中島記念ホールで日本生態学会関東地区会シンポジウムを開催した。
- テーマ：「生態系の文化的サービス：生態学との接点を考える」
- 企画者：宮下直(東大・農)
- 概要：本シンポジウムでは、生態系の「文化的サービス」に着目し、本テーマを研究している4名の研究者に講演を依頼した。「文化的サービス」は人間の精神や社会経済と深く結びついた課題であり、社会・経済・心理・教育などの学問領域において研究が進んでいる一方、生態学分野からの分析ははまだ限られている。本シンポジウムでは、文化的サービスの地図化(見える化)に取り組ん

でいる橋本氏をはじめ、文化的サービスと関連深い分野を扱っている生態学会の若手研究者3名(地区会員の竹内氏・曾我氏と、地区会外より饗庭氏)をお招きし、それぞれの最新の研究をご紹介頂いた。最後に、国立環境研究所の竹中氏より、各講演の内容と、今後の文化的サービス研究の方向性についてコメントを頂いた。

【プログラム】

- 饗庭正寛(東北大学)「植物群集が文化的生態系サービスの供給に与える影響の解明にむけて」
橋本禪(東京大学)「景観価値を代理指標とする文化的サービスの可視化」
竹内やよい(国立環境研)「ボルネオ熱帯における開発が文化的生態系サービスに与える影響～ラン利用を例に」
曾我昌史(東京大学)「“健康”の視点から見た都市の文化的生態系サービスの意義・機能」
竹中明夫(国立環境研)「コメント」
- (2) 地区委員会・地区総会報告
2017年2月11日に東京大学農学部にて地区委員会および地区総会報告を実施した。2016年度の活動報告および決算報告がなされ、2017年予算案が審議され承認された。
- (3) 2017年3月4日に第37回日本生態学会関東地区会修士論文発表会を東京大学本郷キャンパスにて開催した。
- 「溪流に生息するトウキョウサンショウウオの個体数に対する局所環境と生息地連結性の役割」高木香里(東大)
「土地利用の変化が農地群集の生物間相互作用ネットワーク構造に与える影響」篠原直登(東大)
「階層ベイズモデルによるニホンイノシシの個体数推定と農業被害予測」石塚直道(東大)
「クズの分布拡大機構とその制御要因」根本利起哉(宇都宮大)
「多摩川中流域における流路の固定化による孤立水域の形成パターンと植生への影響」井内寛裕(農工大)
「大槌湾赤浜の藻場に生息するヨコエビ類の群集動態」小玉将史(東大)
「既往調査データから底生動物相の回復過程を迫えるか?：渡良瀬川における過去50年間の金属濃度変化との関係」多賀須誠樹(東洋大)
「オタマジャクシの消化管の発生と変態に及ぼす食性の影響」岸本溪(首都大)
「単細胞性シアノバクテリアと糸状性光合成細菌の共存によるバイオフィーム形成」河合繁(首都大)
「紅色光合成細菌 *Rhodospseudomonas palustris* における炭素飢餓によって誘導されるストレス耐性」新井沙和(首都大)
「根の人工切除や昆虫による根食が、ホソムギの個体や根の成長に及ぼす影響」木村ひかり(首都大)
「栽培化に伴うダイズの収量増加と葉の形質の変化：形質間のトレードオフの検出」富樫絢夏(茨城大)

「群落光合成理論の現代的リニューアルとその応用」
佐々木駿（東大）

「群島構造を持つ生態系での種分化と適応放散のモデル解析：生殖形質の進化動態を中心に」清水裕矢（東大）

「繁殖戦略の違いがもたらすミジンコ種内系統の共存」小田切悠（東大）

「長翅目昆虫類の配偶行動：種間での婚姻贈呈様式の比較」吉岡真人（首都大）

「寄生蜂ゾウムシコガネコバチの産卵学習と選好性」古瀬郁子（東大）

「三陸沿岸域に來遊するアカウミガメの代謝速度に対応した行動パターン」木下千尋（東大）

「樹木の葉の化学成分がムササビの採食行動や餌選択に及ぼす影響」伊藤陸実（首都大）

「アリの採餌行動における学習と最適化」伊藤幹（横国大）

「自動追尾システムを用いたアリの活動リズムと社会的相互作用の解析」藤岡春菜（東大）

(4) 2017年11月18日に東京大学理学部2号館講堂にて日本生態学会関東地区会シンポジウムを開催した。

テーマ：「のびる、つかまる、つながる ～つる植物の多様な生態～」

企画者：種子田春彦（東大・理）、鈴木牧（東大・新領域）

概要：つる植物は力学的な自立しない植物の総称であるが、詳しく見ると極めて多様な生存戦略が含まれる。本シンポジウムでは、つる植物を研究対象とする4名の講演者に話題提供を頂き、つる植物の生存戦略の面白さや、特殊な生態現象に対する解析の方法論について広く議論を行った。まず、企画者の種子田から集会の趣旨や各講演者の研究内容が紹介された後、関東地区会員である市橋氏と森氏より、森林内における木本性つる植物の成長や増殖に関する研究成果が網羅的に紹介された。休憩を挟んだ後半では二組の招待講演が行われた。山尾氏・深野氏からは、つる植物の自他識別機構に関する操作実験に基づく研究成果が紹介され、青木氏からはネナシカズラ（巻き付いた宿主の茎から養分を吸収する寄生性つる植物）の生理学的・分子生物学的研究の成果が紹介された。全講演の最後に、井上氏から各講演への質問と合わせて、今後のつる植物研究の方向性に関するコメントが提示され、講演者と参加者が総合討論を行った。講演ごとに会場から専門的で高水準な質問が多数寄せられ、活発な意見交換が行われた。記名を頂いた参加者（30名）の所属は大学、公的研究機関、一般企業など多岐にわたり、また地区会外の遠隔地（関西・東北など）からも5名のご参加を頂いた。

【プログラム】

種子田春彦（東大・理）「趣旨説明」

市橋隆自（東大・農学生命）「木本性つる植物の成

長特性～自重支持依存のコストやリスクを考える」

森英樹（筑波大・生命環境科学）「樹木に巻き付く木本性ツル植物フジの多くはクローン？—遺伝解析を通じてわかったこと—」

山尾僚（弘前大・農学生命）・深野祐也（東京大・農）

「つる植物の巻き鬚における多様な識別能」

青木考（大阪府立大・生命環境科学）「つながるツル～ネナシカズラコネクション～」

井上みずき（日大・生命科学）「コメント」

中部地区会

(1) 平成29年度（2017年度）中部地区会大会及び総会を開催

平成29年度総会及び中部地区会大会を開催

開催日時：平成29年12月2日13:00～17:30（総会及び大会：新潟大学・駅南キャンパス「ときめいと」）

総会（13:00～14:00）の出席者及び主な審議事項は次の通りである。

・出席者：浅見崇比呂・井田秀行・大塚俊之・岸本圭子・北村俊平・斎藤琢・崎尾均・鈴木茂信・本間航介・山本聡子・吉竹晋平・和田直也・高田宜武・永田尚志・横畑泰志（以上15名）

・報告事項として助成金活動が紹介された。今年度は4件の応募があり、厳正なる審査の結果、以下に示す2件の研究課題が採択された。

① 宮澤裕太郎・信州大・院・M2（2017年4月1日現在）「巻貝専食ヘビと巻貝の相互作用における左右性の生態機能」

② Noelikanto Ramamonjisoa・名古屋大・博士研究員（2017年4月1日現在）「Contribution of tadpoles to nutrient recycling in lentic environments in Japan」

・会長の太塚俊之より、平成29年11月20日現在までの会計報告があった。引き続き平成30年度案が示され了承された。

・大学院生や若手研究者等を対象とした研究助成制度案が示され、次年度も引続き実施することが了承された。

・地区会費の廃止に伴い、中部地区会会則の付則第1条の削除が提案され、了承された。

・次年度の中部地区会大会について、岐阜大学において2018年11月下旬頃の日程で開催することとなった。

総会終了後、研究発表会（14:10～17:30）が行われた。参加者は72名であり、1題の講演会発表と38題のポスター発表があった。発表プログラムは以下の通りである。

講演会（招待講演）

紙谷智彦（新潟大学・自然科学研究科）「豪雪地の旧薪炭ブナ林を用材林として活用しながら原生型構造のブナ林へ誘導する」

ポスター発表会

1) 「溪畔林の林床植生に及ぼす溪流攪乱の影響」

- 伊藤菜美・崎尾均
- 2) 「巻貝専食ヘビと巻貝の相互作用における左右性の生態機能」○宮澤裕太郎・浅見崇比呂
 - 3) 「人為的攪乱の影響下にある山岳道路端での在来植物と外来植物の標高と季節による変化」○日台雄斗・松浦亮介・佐藤利幸
 - 4) 「名古屋市東部におけるネブトクワガタの生息と樹林環境との関連性」○堀江啓太・大野研
 - 5) 「カントウマムシグサの有効な種子散布者：動画解析と発芽実験を用いた考察」○前田大成・北村俊平
 - 6) 「ヘビイチゴとヤブヘビイチゴの給餌実験によるノトマイマイの種子散布能力の検証」○松山佑希子・北村俊平
 - 7) 「マツ枯れ海岸林に植栽した広葉樹の活着に及ぼす残存林冠のナース効果」○米山隼佑・紙谷智彦
 - 8) 「早春の写真撮影で得られる混芽数によるブナ種子生産量の推定とその応用」○丸山諒子・小林誠・紙谷智彦
 - 9) 「マツ枯れが激しいクロマツ海岸林に自然侵入したシロダモの天然更新」○中山美智子・紙谷智彦
 - 10) 「窒素循環を指標とした里山評価」○井田勇也・吉川夏樹・本間航介
 - 11) 「モリアオガエル幼生の防衛形態変化に関する野外研究」○柳澤海大・岸田治・阿部晴恵
 - 12) 「ヒノキアスナロ林の更新様式が群落構造に与える影響」○内木翔大・崎尾均
 - 13) 「管理手法の異なる里山棚田景観における土壤動物群集を用いた環境指標の開発」○古郡憲洋・岸本圭子・本間航介
 - 14) 「ニホンザル加害群における資源選択性の時間的変化」○上田羊介・望月翔太・山本圭介・村上拓彦
 - 15) 「佐渡に侵入した外来ヌマエビ ～分布調査と起源の推定～」○星山功太・包麗奈・間島啓太
 - 16) 「立山における高山植生の分布域変化について—ドローンを用いた植生モニタリング—」○武穂恵利果・楠本成寿・和田直也
 - 17) 「立山に生育するハイマツのリターフォール量の経年変化について」○武田美咲・和田直也
 - 18) 「状態空間モデルを用いた新潟県に生息するツキノワグマの個体数推定」○市川麻衣・望月翔太・山本麻希・浅田正彦・村上拓彦
 - 19) 「森林の断片化がクワリの堅果生産とその利用昆虫相に与える影響」○鶴岡建汰・神保宇嗣・梶村恒
 - 20) 「石垣島吹通川マングローブ林の微生物呼吸量の推定」○荒井秀・友常満利・吉竹晋平・大西健夫・岡田美幸・大塚俊之
 - 21) 「常緑広葉樹（ツブラジイ）林における土壤呼吸量の季節的・空間的変動」○國枝秀・大塚俊之
 - 22) 「ドローン（UAV）を用いた写真測量による森林資源量の推定—カラマツ林を例に—」○TRAN DINH TUNG・清野達之・和田直也
 - 23) 「北極圏と中緯度高山におけるチョウノスケソウの葉形質の比較」○島朱音・玉置大介・唐原一郎・Cooper J. Elisabeth・関川清広・丸尾文乃・和田直也
 - 24) 「新潟にアサザは何クローン残っているのか？～MIG-seq法を用いたクローン識別の試み～」○吉田颯汰・竹村衣咲・網本良啓・陶山佳久・間島啓太
 - 25) 「ヤブツバキとユキツバキの送粉様式と種子生産の比較」○片山瑠衣・三浦弘毅・阿部晴恵
 - 26) 「ミズナラにおける萌芽枝形成と抑制芽頻度との関係」○平方広大・本間航介
 - 27) 「冷温帯落葉広葉樹林におけるレジンコア法を用いた土壌窒素動態の解明」○稲垣沙耶・吉竹晋平・大塚俊之
 - 28) 「多雪地ブナ林の主要3樹種（ブナ、ハウチワカエデ、オオカメノキ）の根曲がりの特徴（予報）」○頓所佑大・井田秀行
 - 29) 「茅葺き屋根材としてカリヤスが持続的に利用されている茅場の維持過程」○森谷まみ・井田秀行
 - 30) 「分散能力の異なる樹木の遺伝的構造の比較—南部フォッサマグナを中心に—」○阿部晴恵・渡辺洋一・長谷川雅美
 - 31) 「武蔵の国（埼玉県と東京都陸域）およびリニア新幹線予定ベルト地域のシダ植物種密度と種組成の30余年間での変遷可能性」○佐藤利幸・菅原康剛・松浦亮介・長谷川慎平・田中崇行
 - 32) 「Contribution of tadpoles to nutrient recycling in Japanese paddy fields」○Noelikanto Ramamonjisoa, Yoshihiro Natsuhara
 - 33) 「佐渡島東浜地先におけるアワビ類とサザエの生息地環境評価」○濱岡秀樹・伴田裕之・佐藤智則・池田大悟・石本綾子・藤田利昭
 - 34) 「3次元データを用いた着生植物の分布調査手法の開発—途中報告—」○丸尾文乃・和田直也
 - 35) 「富山県の主要河川水系における水生昆虫相の変遷について」○鈴木茂信・横畑泰志
 - 36) 「佐渡島と本州のヤマアカガエルの形態比較」○藤野光種・小林誠・阿部晴恵
 - 37) 「長野県北部の豪雪地の古民家にみるブナ材利用の特徴」○井田秀行
 - 38) 「スギ、ブナ混交林の森林斜面上におけるシダ植物群集の生態分布」○大杉周・佐藤利幸
- ポスター賞に応募のあった29名中、次に示す3名(2題、1題は連名)が「優秀ポスター賞」に選ばれ、表彰が行われた。
- 宮澤裕太郎(信州大学総合理工学研究所)
星山功太(新潟明訓高校 生物部)
包麗奈(新潟明訓高校 生物部)

近畿地区会

(1) 2017年度第1回地区会委員会

日時：2017年6月3日(土)

会場：理化学研究所 IIB サロン(神戸市中央区)

議事：1) 2016年度決算報告、2) 2019年(3月)日

本生態学会兵庫大会の開催について、3) 地区会費の廃止についての意見とりまとめ、4) 京都府亀岡市アユモドキ保全に関する自然保護専門委員会からのパブリックコメントの提出について、5) 2017年度公募集会の応募状況、6) 2017年度第2回例会の開催日程等について、7) その他

主な議事として、日本生態学会神戸大会を2019年3月15日～20日に神戸国際会議場にて開催する。また、地区会費については当面地区会費をゼロとする学会本部の方針に従うことが了承された。公募集会について審査を行い5件の採択を決定した。

(2) 2017年度近畿地区会総会および第1回例会

日時：2017年6月3日(土)

会場：理化学研究所 IIB サロン(神戸市中央区)

【総会】上記の第1回地区会委員会の議事および協議事項について報告した。

【第1回例会】

第20回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(望月昂、曳地穂の2名に奨励賞を授与、代表者のみ記載)一般発表

- 1) 「オオゴキブリの餌資源に関する基礎的研究」瀬口翔太・澤島拓夫・鈴木雄祐(近大院農)
- 2) 「アルゼンチンアリと街路樹～越冬環境としての樹種選好性～」藤田昂大(近大院農)
- 3) 「捕食者の密度によらない誘導防衛：野外ミジンコの事例」永野真理子・土居秀幸(兵庫県立大院・シミュレーション)
- 4) 「国内シイ林における外生菌根菌群集の地理構造とその形成要因」松岡俊将(兵庫県立大院・シミュレーション)・岩崎貴也(神奈川大理)・川口恵里(京大理)・土居秀幸(兵庫県立大院・シミュレーション)・大園享司(同志社大理工)
- 5) 「春日山原始林における植生間の鳥類多様性の比較」岡本真帆・大矢樹・武田紗季・伊東明・名波哲(大阪市立大院・理)
- 6) 「環境DNA分析による日本産メダカ属2種の同時検出に向けたReal-time Multiplex PCR検出系の開発」辻冴月・入口友香・寺村伊織(龍谷大院理工)・北川忠生(近畿大農)・山中裕樹(龍谷大院理工)
- 7) 「繁殖干渉下の在来近縁植物2品種の共存機構—ツクサ・ケツクサ系を用いて」勝原光希・丑丸敦史(神戸大院・人間発達環境学)
- 8) 「小規模ダム河川におけるダム・堰堤・支川流入が底生動物群集に与える影響」水守裕一・松岡真梨奈・赤松真治・谷川緑・相馬理央(兵庫県立大・環境人間)・一柳英隆(水源地セ)・土居秀幸(兵庫県立大院・シミュレーション)・片野泉(奈良女子大学理)

(3) ヒアリ等対策検討会議の開催と要望書の提出

日時：2017年6月22日(木)

会場：三宮研修センター(神戸市中央区)

神戸港および尼崎市にて発見された外来アリ類のヒアリに関する対策と関係者間での情報共有のため、近畿地区会および生態系管理委員会が主催して緊急会合を開いた。五箇公一氏(国環研)および辻和希氏(琉

大)、橋本佳明氏(兵庫大)を招き、ヒアリの分類や生態、対策について意見交換するほか、ヒアリの同定用サンプルを配布した。環境省、周辺自治体ならびに大学、博物館関係者約60名が集まった。また、この会合の議論をもとに、ヒアリ対策として必要な事項を取りまとめた要望書を作成し、環境省および国土交通省に提出した。

(4) 公募集会の開催

生態学の進歩と普及を図るために、近畿地区会員が主催する生態学会員および一般市民を対象とした生態学関連の集会をサポートするため、公募集会について2017年4月23日～5月31日まで募集した。応募件数は5件あり、地区会審査員で協議した。5件すべて採択とし、評価に応じて金額を配当した。実施状況については以下のとおり。

- ①第8回琵琶湖地域の水田生物研究会(担当：大塚泰介/滋賀県立琵琶湖博物館)、実施日：2017年12月17日(日)、場所：琵琶湖博物館(参加者130名)
- ②フィールドシンポジウム「芦生天然林の再生を如何に進めるか」(担当：前迫ゆり/大阪産業大院人間環境)、実施日：2017年7月16日(日)、場所：京都大学芦生演習林(参加者29名)
- ③進化群集生態学シンポジウム2017(担当：門脇浩明・潮雅之/京大大学生態学研究センター)、実施日：2017年9月15日(金)、場所：京都大学理学部セミナーハウス(参加者60名)
- ④身近な草原の魅力～生物多様性を次世代に伝える民官学の協働のあり方～(担当：橋本佳延/兵庫博・武田義明)、実施日：2018年2月17日、場所：兵庫県立のじぎく会館
- ⑤アカミミガメ駆除で淀城跡公園お堀のハス『淀姫』保全プロジェクト報告集会(担当：多田哲子/京都府保健環境研)、実施日：2017年11月19日(日)、場所：淀会館(参加者35名)

(5) 2017年度第2回地区会委員会

日時：2017年12月16日(土)

会場：兵庫県立人と自然の博物館(三田市)

議事：1) 2017年度会計中間報告、2) 2017年度公募集会の実施状況について、3) ヒアリに関する対応について、4) 2019年(3月)日本生態学会兵庫大会の準備状況について、5) 選挙結果の報告および次期(2018-2019年度)の体制について、6) 自然保護専門委員会からの報告、7) その他

主な議事として、次期の事務局体制として、会長徳地直子(京大・フィールド研)、庶務伊勢武史(京大フィールド研)、会計檀浦正子(京大・農)が了承された。また地区会選挙の結果、大阪府(7名)滋賀県(6名)京都府(12名)兵庫県(7名)和歌山県(2名)奈良県(2名)が選出された。

(6) 2017年度第2回例会

日時：2017年12月16日(土)

会場：兵庫県立人と自然の博物館(三田市)

第23回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(勝原光希(神戸大院人間発達)、辻冴月(龍谷大院理工)

の2名に奨励賞を授与、代表者のみ記載)

一般発表

- 1) 「岩礁域の穿孔生物と、住み込み共生者の生態適応」
山守瑠奈・加藤真 (京大院人間環境)
- 2) 「腐朽木で繁殖する3種の昆虫類の腐朽材の利用形態と破砕能」瀬口翔太・澤島拓夫 (近大院農)
- 3) 「伊豆諸島における長口吻送粉者の不在が海浜植物群集の花形態に与える影響 —花筒の長さによって異なる花形質変化パターン」平岩将良・丑丸敦史 (神戸大人間発達)
- 4) 「機能形質から分布を説明する：日本列島における木本の例」河合清定・岡田直紀 (京大農)
- 5) 「アライグマの排除を目指した罠の設置場所と時期の検討」朴侑希・栗山武夫・高木俊・東出大志・野瀬遵・横山真弓 (兵県大院環境人間)
- 6) 「ツキノワグマの秋季出沒に関わる資源量ギャップの分析」野瀬遵・横山真弓 (兵県大院環境人間)

中国四国地区会

(1) 第61回中国四国地区大会 (2017年5月13, 14日, 於: 高知大学朝倉キャンパス)

【ポスター発表】 (5月13日)

「降水量の季節変化パターンが *Chenopodium album* の窒素応答に与える影響」○穂積由実・衣笠利彦 (鳥取大・農)

「植物体の形状が砂嵐の発生抑制に与える影響」○*宮脇真美・衣笠利彦・劉佳啓・木村玲二 (鳥取大・農・乾地研)

「クラスター根を形成する植物」○諸石智大¹・和崎淳²・坪田博美¹ (1 広島大・院・理、2 広島大・院・生物圏)

「高知県中土佐町の常緑広葉樹林帯の里山におけるニホンザルの環境利用」○*寺山佳奈¹・金城芳典²・加藤元海¹ (1 高知大・総合人間自然科学研究科、2 四国自然科学研究センター)

「ニホンジカによる強度の食害を受けた山地斜面の土壌侵食過程」○*齊藤翼・石川慎吾・比嘉基紀・本間こぎと (高知大・院・理)

「林床植生の保全を目的に設置した防鹿柵の隣接地域における植生回復過程」○*池田華優・石川慎吾・比嘉基紀 (高知大・院・理)

「遺跡出土の骨角器からみる弥生時代のシカ利用」○*井之上侑雅・高田健一・中原計・永松大 (鳥取大・地域)

「*Eurytoma monemae* (ハチ目カタビロコバチ科) の生態学的研究」○*松岡旦¹・楯智樹¹・三浦誠矢¹・荒川良²・伊藤桂²・福田達哉³ (1 高知大・院・総合人間自然科学、2 高知大・農、3 東京都市大・知識工)

「ナゴヤダルマガエル (*Pelophylax porosus brevipodus*) の越冬場所における土壌環境条件 (予報)」○*多田正和¹・伊藤邦夫²・中田和義¹ (1 岡山大・院・環境生命、2 倉敷市)

「テッポウエビ科の巣穴構造：テッポウエビ *Alpheus brevicristatus* における調査と総説」○*邊見由美¹・

藤原稚穂²・桐原聡太³・岡田祐也³・伊谷行¹ (1 高知大・院・黒潮圏、2 高知大・教育、3 高知大・院・教育)

「ツマゲロスジハゼによるテッポウエビの巣穴利用：行動観察と巣穴形成実験から」○*桐原聡太¹・藤原稚穂¹・邊見由美²・伊谷行² (1 高知大・教育、2 高知大・黒潮)

「高知県浦戸湾におけるシオマネキ (スナガニ科) の分布：1998年から2016年までの調査記録」○美濃厚志^{1,2} (1 株式会社東洋電化テクノロジーリサーチ、2 高知大学・院・黒潮圏)

「サガニ *Macrophthalmus abbreviatus* の個体群生態」○*塩崎祐斗¹・古賀庸憲² (1 高知大・院・黒潮、2 和歌山大・教育)

「鳥取砂丘におけるハンミョウ2種の成虫の季節消長とエリザハンミョウの個体数推定」○鶴崎展巨・唐沢重考・柴田祥明・飯田礼康・越田佳苗・塚本鍊平・長谷川和樹・福井順也・村瀬真史・和田将典 (鳥取大学地域学部生物学研究室)

「鳥取県内の海浜植物の分布状況 - NACS-J 自然調べからの報告 -」○清末幸久¹・谷口真一²・田中重樹²・井原早紀³ (1 鳥取県立博物館、2 NACS-J 自然観察指導員鳥取連絡会、3 環境省近畿地方環境事務所浦富自然保護官事務所)

「福岡県福津市福間における岸マツ林の自律的管理」○朝波史香¹・伊東啓太郎²・鎌田磨人¹ (1 徳島大理工学域、2 九州工業大院工学府)

「海岸林に植栽したクロマツ苗木の成長と光環境・林分構造」○佐々木剛¹・堀誠紘²・朝波史香¹・鎌田磨人¹ (1 徳島大・大学院社会産業理工、2 徳島大・工・建設)

「特定外来生物オオハンゴンソウの耕作放棄地への定着と抑制の試み」○永松大¹・大家穂月²・鎌田季紗²・中井結依子² (1 鳥取大・農、2 鳥取大・地域)

「里山の生物多様性評価法の開発」○若山勇太¹・橋越清一² (1 宇和島東高、2 愛媛大院・教育)

「農地1区画単位からみた棚田景観の変化」○*富森加耶子・永松大 (鳥取大・院・地域)

「高知県における絶滅危惧植物マルバテイショウソウの保全生態学的研究」○*杉本清子¹・瀬尾明弘²・前田綾子²・石川慎吾¹ (1 高知大・理、2 牧野植物園)

「コウノトリの国内第二の繁殖地としてみる鳴門市の餌環境評価」○安達直之¹・溜島卓也²・山城明日香²・河口洋一¹ (1 徳島大学院、2 徳島大学)

【口頭発表】 (5月14日)

「雄性両全性同株ケツクサにおける花の性表現決定時期」原里美¹・宮崎祐子²・邑上夏菜³・勝原光輝³・丑丸敦史³ (1 岡山大・農、2 岡山大・院・環境生命、3 神戸大・院・人間発達環境)

「竹蛇籠魚道による小河川の水域ネットワーク再生」山下慎吾 (魚山研)

「IBPで調査された高知県鷹取山のモミ林の現在の林分構造と現存量」○米田令仁・稲垣善之・酒井敦 (森林総研四国)

「高知県の人工林における間伐後の樹冠葉量の回復」
○稲垣善之¹・中西麻美²・深田英久³ (¹ 森林総研四国、² 京都大、³ 高知森技セ)

「岡山県赤磐市の地質・地形と植生の関係」○太田 謙¹・波田善夫² (¹ 岡山理大・NFC、² 岡山理大・生物地球)
「石鎚山山頂南側斜面のササ草原におけるシコクシラベの分布拡大」丸山紗弥華¹・杉田久志²・○比嘉基紀¹・石川慎吾¹ (¹ 高知大・理、² 富山県農林水産公社)

【高校生研究発表】(5月13日)

【公開講演会】(5月13日)

土佐湾の生物の魅力 ～過去から現在、マクロからミクロまで～

(コーディネーター：松井透 (高知大学理工学部生物科学科))

「土佐湾の魚類と分類学」遠藤広光 (高知大学理工学部生物科学科)

「もう一つの化石記録：生痕化石から知る古生態・古環境」奈良正和 (高知大学理工学部生物科学科)

「分子系統からみた宝石サンゴの系統関係」宇田幸司 (高知大学理工学部生物科学科)

【総会】(5月14日)

a. 報告事項

庶務報告

学会誌発行部数、地区会員の動向(2016年12月末現在267名、昨年度と同数)、会費納入率、活動報告について

地区選出委員(地区代議員、自然保護委員)から報告

b. 審議事項

1) 2016年度会計決算案

・大田会計幹事から説明があり承認された。

2) 地区会費廃止について

・鎌田地区会長から説明があり承認された。

3) 2017年度会計予算案

・大田会計幹事から説明があり承認された。

4) 2018年度合同支部大会開催地：山口

5) 2019年度合同支部大会開催地：広島

6) 2021年の全国大会開催地(中国四国地区)について

・鎌田地区会長から説明があり、今後、学会事務局に全国大会開催における現地事務局の役割と会場規模について確認し、県幹事に報告すること。県幹事は各県における会場規模を調べ、開催の可能性を検討して地区会長に報告し、地区会長が県幹事と調整して開催地の検討を進めることが承認された。

九州地区会

(1) 2016年度地区委員会

2016年5月28日(土) 鹿児島大学

(2) 地区大会

第61回三学会九州支部・地区合同大会

会期：2016年5月28日(土)、29日(日)

会場：鹿児島大学

【生態学会員による口頭発表】

「鹿児島県の新幹線高架橋で発見されたオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の生息状況」○船越公威¹・佐藤顕義²・大沢夕志³・大沢啓子³・佐伯綾香¹ (¹ 鹿児島国際大・国際文化、² 有限会社アルマス、³ コウモリの会)

「タケノコカワニナの分布を規定する環境要因の解明」○永野昌博・石川真太郎 (大分大・教育)

「ヤエヤママルバネクワガタ雄成虫の「留まり行動」の適応的意義」○上野弘人¹・佐竹暁子¹・荒谷邦雄² (¹ 九州大・理・生態、² 九州大院・比文)

「開花期間は木本と草本により異なるのか？」○川窪藍¹・矢原徹一² (¹ 九州大院・システム生命、² 九州大・理)

「スズメガは蛇ノ目紋のコントラストが強い花を選ぶ：昼咲種と夜咲種を用いた検証」三木望・廣田峻・矢原徹一 (九州大・生態)

「錦江湾奥におけるサツマハオリムシの分布と個体群特性」○古川貴裕¹・山本智子¹・八巻鮎太² (¹ 鹿児島大・水産、² かごしま水族館)

(3) 地区例会

第535回 5月28日(土) 沖縄(琉球大学)

沖縄生物学会大会公開シンポジウムとして開催しました。

<http://www.okibio.jp/active/index.html>

第536回 11月6日(日) 宮崎 宮崎大学教育学部講義棟(4階) L403

「モグラ科の系統進化と、その生物学的面白さ」篠原明男(宮崎大学フロンティア科学実験総合センター生物資源分野)

「重イオンビーム突然変異育種技術の進展：偶然から必然へ」平野智也(宮崎大学農学部応用生物科学科)

第537回 11月19日(土) 佐賀(佐賀大学農学部1号館2F第5番教室)

「ダイズにおける一斉登熟性と窒素転流の関係」鄭紹輝(佐賀大・農)

「昆虫の熱ストレス順応性獲得の分子機構」松村崇志(佐賀大・農)

「トビイロシワアリにおける幼虫・蛹に対する温度調節行動」長岡希隆(佐賀大・農)

第538回 11月26日(土) 熊本(熊本大学理学部2号館1階 C122 講義室)

「食虫植物モウセンゴケ属にみられるアレルギー抑制効果をもつ種のゲノム構成について」星良和(東海大学・農学部・応用植物科学)

「精子特異的タンパク質 protamine1 KO マウスの解析」竹田直樹(熊大本・生命資源研究・支援センター・疾患モデル)

「新燃岳2011年噴火による特異な植生攪乱とその後の植生回復」安部哲人(森林総研九州支所・森林生態)
第539回 12月10日(土) 福岡(福岡女子大学講義棟(C棟) C204室)

「青色光に応答した気孔開口のシグナル伝達機構」武宮淳史(山口大学大学院創成科学研究科)

「ショウジョウバエの摂食行動における意思決定」谷

村禎一（九州大学大学院理学研究院）

「直翅目の排泄行動：フンを蹴り飛ばすオンパッタ」今坂亮介（九州大学大学院システム生命）

第540回 12月17日（土）鹿児島大学理学部2号館1階211号講義室

【高校生による研究発表】

「カマキリの体内に潜む寄生虫について」鹿児島県立曾於高等学校科学部 中釜康佑・中吉蓮太郎・山元穂颯・顧問：大迫武治

「ガウス加速器のゆらぎについて」鹿児島県立曾於高等学校科学部 西川美奈・前田麻衣・上ノ瀬未菜・有野円佳・大峰亜梨沙・顧問：堀之内勇太

「連結ネオジウム球の不可解な動きについて」鹿児島県立曾於高等学校科学部 杉本蓮太・久木山弘忠・顧問：松田智和

「屋久島方言ツクツクボウシの研究～幸屋火砕流による分布拡大仮説の検証と分布拡大経路の解明～」鹿児島県立国分高等学校サイエンス部 田口創磨・松下祐生・反田江吏子・竹下由芽・有馬海誠・前田葉奈・有満彩華・顧問：小溝克巳

【一般講演】

「バイオテクノロジーの発展に寄与するホタルの発光反応」加藤太郎（鹿児島大学学術研究院理工学域理学系）

第541回 12月17日（土）長崎（長崎大学水産学部本館2階 大会議室）

「現生ナマコならびにホシムシの消化管内から見いだされた動植物プランクトンについて」○筒井英人（山形大・理）・F. Lozar (Trino University)・C. Riag-Gobin (University of Perpignan/CNRS)・G. Iwankow (University of Perpignan/CNRS)・八木光晴（長崎大・水産）・山脇信博（長崎大・水産）・R. W. Jordan（山形大・理）

「ロボットを用いたチゴガニの同期的ウェーピング行動の解析」○本木和幸（長崎大学 環境科学部）・藤崎顕彰（九州大学 システム情報科学研究院）・内田誠一（九州大学 システム情報科学研究院）・岡田二郎（長崎大学 水産・環境科学総合研究科）

「チゴガニのウェーピング行動に対するネオニコチノイド農薬（ニテンピラム）の影響」○竹本凌（長崎大学 環境科学部）・藤崎顕彰（九州大学 システム情報科学研究院）・内田誠一（九州大学 システム情報科学研究院）・岡田二郎（長崎大学 水産・環境科学総合研究科）

「後の先：シマヘビの攻撃開始を待ってから逃げ始めるトノサマガエルの逃避」○西海望（長大院・水環）・森哲（京大・理・動物）

「メダカにおける安静時代謝量の集団内変異と遊泳速度との関係」○藤本真悟（琉大・熱生研）・山平寿智（琉大・熱生研）・八木光晴（長大・水産）

「群集のエネルギー代謝量を決定するものは何か？：動物プランクトン編」○八木光晴・楠本成美（長大・水産）・筒井英人（山形大・理）・内田淳・木下 宰（長大・水産）・清水健一（長大・院・水・環総合）・山脇信博・

青島隆・森井康宏（長大・水産）

＜特別講演＞

「代謝量の個体発生的相転移：その生態的意味」及川信（九州大学大学院農学研究院附属水産実験所）

第542回 12月17日（土）大分 大分大学教育学部100号教室（第6回大分自然環境研究発表会と合同開催）

「竹田市岡本のビオトープの微小生物」○細井利男（大分生物談話会）

「大分大学周辺におけるアリ相の解明と環境評価」○笈木あすか・永野昌博（大分大学）

「なぜスズキ成魚は河川に上るのか－河川がスズキにもたらす恩恵を探－」○影平真明（九州大学大学院生物資源環境科学府）

「オオイタサンショウウオの産卵の誘発要因について」○小島美都希・永野昌博（大分大学）

「希少チョウ類の保全活動について－トランセクト調査と発消生長－」○朝倉和紀（九重ふるさと自然学校）

「祖母山系の興味深いいきのこ」○村上康明（大分きのこ会）

「大分川水系に定着した国内外来魚ギギの分布と由来」○高野裕樹¹・星野和夫¹・大倉鉄也¹・松尾敏生¹・渡辺勝敏²（¹大分生物談話会、²京都大学大学院理学研究科）

「平成27年度いきものウォッチング ニホンジカ調査報告」○川野智美（九重ふるさと自然学校）

「坊ガツル湿原を流下する鳴子川における魚類調査報告」○炭本悟朗（NPO法人おおいた生物多様性センター）

「高島のクリハラリス」○安田雅俊¹・森田祐介²（¹森林総合研究所九州支所、²大分生物談話会）

「環境保全団体の抱える課題の抽出と解決策の提起」○伊東英陽・永野昌博（大分大学）

「ササラダニによる食性回復の推移解析－大分市丘陵地の3年間の記録から－」○足立高行（NPO法人おおいた生物多様性センター）

(4) 地区会報70、71号発行

書 評

井上大成・石井 実 編集 (2017) 「環境 ECO 選書 12 チョウの分布拡大」北隆館 457pp. ISBN 978-4-8626-0762-0 C0345 本体価格 4,600 円＋税

自力や他力を問わず、長距離であれ短距離であれ、昆虫は絶えず移動・分散を繰り返しているが、新しく侵入した地域に常に定着できるとは限らない。そのため、分布境界線は絶えず変動している。昆虫が新しく侵入した地域に安定的に定着し、その結果、分布拡大が確認されるまでには、次の三つの要因が複雑に関与している。(1) 新しい地域に侵入する個体群の質と量、時期、(2) 個体群の移動・分散を促進する要因、(3) 新しい地域での定着を可能にする環境要因。これらは、もっばら、生物的

あるいは非生成物的な自然要因であったが、それに加えて、近年の国際的な物流の増加に伴う人為的な要因が(2)の個体群の移動・分散に大きく関与している。さらに、最も声高に強調されている地球温暖化による分布域の極地方向や高地への拡大現象も、元はと言えば、人為的な要因のなせる仕業であり、侵入地域への定着を可能にした要因(3)の一つと捉えるべきであろう。

本書で紹介されている事例は、必ずしも、上述のような三つの要因に分類されておらず、種ごとや各地の事例が錯綜して提示されているので、読者側でどの要因に焦点が当てられた事例なのかを見分けて読み進めることをお勧めしたい。そうすれば、内容を統一して理解する一助となろう。

本書は、総論①と、章立てにされたI、II、III、総論②から成り立っている。総論①では、編者の一人、井上大成氏が「様々な要因によるチョウの分布拡大」について言及し、多くの種の事例を挙げて分布拡大の現状と結果を概観している。とくに、ナガサキアゲハで見られるような地球温暖化による分布域拡大の成功例に限らず、もっと別の要因、例えば、寄主植物や生息環境の変化などで定着が成功した例を挙げている。一方では、定着の要因が特定されていない場合も多いと言う。分布拡大の方向も北上だけではなく、時には南下の例も見られる。また、移動・分散を促す要因として、意図的な放蝶(ホソオチョウやアカボシゴマダラ)や栽培植物への付着に伴う運搬(クロマダラソテツジミ)、交通機関への便乗(バナナセセリ)、台風による運搬(多くの迷蝶の一部)、寄主植物の人為的な植栽による生息可能地域の拡大(ツマベニチョウ)、密度依存的な分散(オオモンシロチョウ)などの例を詳述している。

Iでは、「注目される種の分布拡大の経緯と現状」が述べられている。執筆を分担した著者によって視点が異なり、それぞれ、貴重なデータが報告されているが、紙面の都合上、いくつかのトピックスを以下に挙げた。ミカドアゲハは、DNA解析の結果、温暖化で新地域に定着したと考えるより、寄主植物の植栽か放蝶などの人為的な要因で分布拡大が促されたと考えるべきだと言う。福島県や北関東におけるウスバシロチョウは、地域によっても年によっても南下する速度が異なることが長年のデータで示されている。富士山麓におけるオオムラサキの分布は、誤った教育的視点による放蝶の結果だと言う。近年のクロマダラソテツジミの分布拡大には、目を見張るものがある。それだけに、本書でもあちこちで取り上げられ、移動・分散と定着の要因に関する諸説が多方面で検討されている。今後の行方が気なるチョウの一種であり、腰を据えた生態学的な取り組みを期待したい。

ホシミスジの分布拡大の事例で、とくに、近畿低地型の分布拡大について挙げられたいくつかの仮説には、他の執筆者があまり言及していない、定着に関与する侵入個体群の質的要因も含まれている。それに加えて、分布域の地質条件や化性も含めた議論がなされているのは興味深い。長野県におけるクロコノマチョウの侵入地での定着条件として、発育有効積算量と発育ゼロ点に着目した点は注目に値する。温暖化が定着条件の一つだと考

えれば、他のチョウでもこのような実験が必要であろう。将来、ぜひ、耐寒性にまで踏み込んで欲しい。

IIでは、「各地で何が起きているのか?」について、全国10地域からの報告が掲載されている。それぞれの地域で特有の現象が見られる。例えば、北海道では、改変された環境を利用するチョウや外来種や栽培種に寄主拡大したチョウの例が多い。東北地方では、幅広い寄主範囲を持つツマキチョウが分布を拡大し、オオモンシロチョウは岩手県まで南下したが、それより南では、気温や湿度など気候的な要因で定着できないと言う。とくに、南西諸島は注目すべき地域であろう。ここでは、様々な要因が関与する典型的な分布拡大の失敗と成功の歴史を如実に見るができる。本書のエッセンスとも言うべき部分である。

IIIの「様々な視点からチョウの分布拡大を捉える」では、熱帯地方やヨーロッパなど海外での分布拡大、コンピューターシミュレーションによる分布拡大の予測、在来種と外来種の種間競争、外来種の駆除、天敵寄生蜂との関係、外来植物を利用する希少種、放蝶による分布拡大などの事例が報告されている。多岐にわたる内容の中で、私がとくに関心を抱いたのは、外来植物を利用する3種のチョウであった。複数種の植物を与える飼育実験で、発育所要日数や体サイズ、産卵数などを調べた結果は興味深い。在来昆虫が外来植物に寄主範囲を拡大することで、分布拡大に弾みがつき、個体数も増加するシナリオは、私の研究している虫えい形成昆虫では、かなり希な現象である。寄主範囲の拡大とは異なり、寄主転換では元の寄主に戻れない。ミヤマシジミが完全にコマツナギに寄主転換するかどうか、今後の動向を注視したい。

総論②では、もう一人の編者、石井実氏が「分布型と生活史特性からみたチョウ類の分布変化」をまとめている。日本産土着種245種のうち、204種は大きな分布変化を示しておらず、31種が分布拡大種で、そのうち24種が、いわゆる南方系であると言う。これらに加えて、かつて「迷蝶」として扱われていた「非土着種」の中にも南方系の分布拡大種が多く含まれている。また、石井氏は分布拡大種とは別に、分布域内での地域個体群の生息場所拡大が認められるチョウを「勢力拡大種」と定義し、コミスジやコムラサキなど10種を顕著なものとして取り上げている。多くは本州に分布するものらしい。このような傾向は、チョウ類だけではなく、他の分類群でも共通しているのを知りたいところである。さらに、石井氏は分布拡大とは反対の分布域が縮小するチョウにも言及し、地球温暖化の影響が、太平洋側の低地個体群の衰退に関与しているのではないかと警鐘を鳴らしている。

本書では、用語の間違った使い方が少し気になった。「気候温暖化」は「地球温暖化」に統一すべきである。「気候」には、風や降水量、天気など様々な事象が含まれているため、気候そのものが温暖化しない。また、「寄主範囲拡大」と「寄主転換」、「食草転換」が混同されている。本種に出て来る事例の多くは、「転換」ではなく、「寄主範囲拡大」であろう。これに関連して、「食性転換」も使われていたが、チョウでは、「植食性」から「肉食性」

などに転換する訳ではない。もちろん、これらの誤用が、直接、本書の価値を貶めているものではないが、もし将来、改訂される機会があれば改善を願いたい。

少年時代、チョウの採集に夢中だった私にとって、近年のチョウの分布拡大は大きな関心事の一つである。チョウは昆虫の中でも最も人気の高い分類群であり、各地の多くのチョウ愛好者によるきわめて豊富な分布情報や生息環境の変遷に関する情報が長年に渡って蓄積されている。本書は、チョウを研究対象とした利点を生かして豊富な情報を見事にまとめ、昆虫の分布拡大という重要なテーマに取り組んだ注目すべき一冊であると言える。チョウの分布拡大の様々な事例を通読し、新地域への移動と定着の過程で、とくに、放蝶や外来植物、環境改変など、様々な人為的な影響の大きさを痛感させられた。

生態学に関心の高い本学会員に本書の一読をお勧めしたい。これだけ多くのチョウ愛好者がいるのに、これまで日本では、生態学者によるチョウの個体群動態に関する本格的な研究があまり行われて来なかった。分布拡大や絶滅危惧種、里山の多様性など、多くの問題は、生態学者が本格的に取り組むべき個体数変動の研究テーマである。本書との出会いを機に、若い生態学者の参入を期待したい。

(九州大学 湯川淳一)

小見山章 (2017) 「マングローブ林 変わりゆく海辺の森の生態系」 京都大学学術出版会 273pp. ISBN 978-4-8140-0088-3 本体価格 2000 円+税

本書は、35年にわたって東南アジアでマングローブ林研究を行ってきた一人の研究者の活動の記録である。著者は、教員時代を通じてマングローブ林にはいり、学生とともに毎年数ヶ月をそこで過ごして来た。ほんの40年前には、今ではもう見ることのできない、鬱蒼としたマングローブ林があり、しかしそれらが急速に失われていく様子が淡々と描かれ、現在の私たちに静かに訴えかける。

本書では、著者が熱帯に憧れ、マングローブ林に魅せられ、研究に没頭していく様子が時系列で示される。著者は研究チームから与えられた課題に取り組むなかで、マングローブ林の生態についての素朴な疑問を抱く。それを解くために、いくつかのマングローブ林を訪れ、最終的には3つのサイトに絞り込み、研究を続ける。地道なデータの集積を行い、それらが解き明かされていく様子は、探偵小説のようで非常に興味深い。

とくに印象に残るのは、マングローブ林が泥の潮間帯に分布していることから、マングローブ林は他の森林生態系に比べて、地上部に対して地下部が大きいとする「根だらけ仮説」を思いつき、それを検証していく過程である。著者らは泥の中に入ってデータをとり、マングローブ林の根系に関する根密度分布モデルを得て、さらに、世界のマングローブ林に共通の現存量推定式を求めることに成功する。それらの発展として、マングローブ林ならではの炭素蓄積についての研究成果も披露している。

学術的にも非常に価値の高いものであるが、ぼろりと書いた、“・・・重量測定のためだけに、マングローブ林の樹木を伐る必要はもうなくなった。”という一行が著者の真摯な姿勢を伺わせる。研究では破壊的な作業を伴うことが多いが、その目的、その利用について深く考えさせられた。

全体として本書は、筆者の研究成果がその作業の様子とともに記されており、時代とともに変遷する森林問題を追体験できる。また、本文とは別に設けられた5つの欄を用いて生態学の手法も紹介されているので、筆者がマングローブ林で何をして、どのようなデータをとったのかが非常に分かりやすく、生態学者でなくとも理解できる内容になっている。研究の過程での、多くの協力者との出会いや別れ、熱帯ならではの思いもかけない出来事にはひやひやさせられたり、ほっとしたり、一般向けの読み物としても十分楽しめる。基礎研究を社会につなぐきっかけにもなるだろう。

長期に及ぶ生態学研究は欧米では古くから組織として行われている。一方、我が国ではその歴史は浅いが、“一研究者”による長期にわたる素晴らしい研究が少なくない。それらが論文だけでなく、このような書籍やデータペーパーとして残されれば、今後の生態学の発展だけでなく、生態学を志す人たちに大きく寄与するだろうとしみじみ思った。学術書の紹介としてはかなり情緒的になってしまったが、それは評者の力不足によるものであり、本書がマングローブ林を知るには絶好の一冊であることを強調しておきたい。

(京都大学フィールド科学教育研究センター 徳地直子)

平嶋義宏・広渡俊哉 編著 (2017) 「教養のための昆虫学」 東海大学出版部 227pp. ISBN: 978-4-486-02081-3 定価 3,000 円 (税別)

私は子供の頃に虫捕り網を振り回したり、虫の名前を図鑑で調べたりした経験がほとんどない。大学に入ってから興味をもったのは植物であり、そのため私にとって昆虫といえば、植物の送粉者だったり、植食者だったりというように、植物から見た「脇役」の存在だった。その後研究対象となったコミカンソウ科植物の送粉者のホソガ科については多少詳しくなり、新種記載などもしたが、以上のような理由から私の昆虫に関する知識には著しい偏りがある。そのような私にとって、昆虫の世界を広く分かりやすく紹介した本書は、私に欠けていた知識を身につけるのに最適の教科書だった。

近年、昆虫の優れた能力や奇抜な生態を魅力的に紹介した本が数多く出版されるようになり、かつてないほど昆虫学に熱い視線が注がれているように思う。一方、このような一般書の範囲から一步踏み出して、より体系的な知識を身につけたいと思う人にとって、昆虫学全般に関する読みやすい教科書はあまりなかったように思う。本書は全体にカラー写真や美しい線画がちりばめられており、手にとってページを眺めただけで読む前から親しみを覚えた。

本書は14章からなり、導入に続く章では昆虫の体づ

くりを、体制が大きく異なるいくつかの目の昆虫の線画を用いて解説している。例えば、昆虫の口器はいくつもの節が組み合わさってできたものだが、チョウの口吻とミツバチの口吻はどの部分とどの部分が相同だろうか。本書では、互いに相同な部位を同じ配色にするといった工夫がされており、解説が非常に分かりやすい。続く章では、昆虫の驚くべき適応現象の数々が、行動、生殖様式、食性、寄生様式などの項目ごとに解説されている。また、水中（海水中を含む）への適応、海洋島での適応放散、洞窟適応、擬態、社会性などの内容も詳しい。興味深い形態や生態をもった昆虫が数多く登場するが、そのいくつかは「天下の奇虫」などの形容とともに紹介される。海にすみ、雄が前翅をオールのように使って水面を滑走し、海底から浮き上がってくる無翅の雌を探し回るオヨギユスリカなどがその例だ。文章には、筆者自身がその虫に出会った時の驚きや感動がにじみ出ており、そのような筆致が、教科書的な解説にはない読み物としての親しみやすさを本書に加えていると感じた。

また、これは筆者らが意図したことではないと思うが、本書で紹介される昆虫の生態のかなりのものが、日本の昆虫学者によって明らかにされたものだという点も興味深かった。本書を通して読むと、日本の昆虫学の成果を概観したような気分になれるのも、海外の昆虫学の教科書などにはない本書の特色だろう。

後半の章では、人と昆虫の関わりや、分子情報の活用、昆虫の保全などについても解説されている。末尾に昆虫の各目の特徴が簡潔にまとめられており、全31目の代表種が、小松貴氏、紙谷聡志氏らの美しい写真で図示さ

れている。

昆虫の世界を広く見渡した本書を読んで、私なりの発見もあった。例えば、昆虫の発音器官は、バッタ類、セミ類、コウチュウ類、ガ類、アリ類、カ類などにおいて、それぞれ体の異なる部分に独立に進化しており、音を受容する聴覚器もそれぞれの系統で体の異なる位置に発達している。これは、例えば脊椎動物の進化の過程で発音器官と受容器官が口と耳にほぼ限られているのとは対照的だ。昆虫が進化する過程で、音が知覚や交信の手段として有効な環境とそうでない環境を繰り返し経験してきたことが、発音方法の多様性に表れているのだろう。

また、昆虫が（昆虫を含む）他の生物に寄生する例は無数に存在するが、他の生物にとっての共生者として振る舞う例は、いくつかのよく知られた例（送粉共生、アリ防衛共生、栽培共生）を除いて非常に少ない。このことは、本書に寄生に関する章はあっても共生に関する章がないことから明らかで、あらためて昆虫は搾取に長けた生物だと実感した。生態学において、寄主と寄生者の進化動態に関する理論や仮説は多いが、共生者間の進化に関する学説は少ない。これは単に共生の研究が遅れているだけだと思っていたが、寄生性昆虫の見事なまでの多様性を目の当たりにして、共生についての理解が遅れをとるのも無理のないことだと思った。

このように、読者自身の興味に沿ってそれぞれの読み方ができるのも、幅広い話題を読みやすく紹介した本書の楽しみ方の一つかもしれない。

（京都大学生態学研究センター 川北 篤）



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは、全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成30年3月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申し上げます。

改めて平成30・31年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成30年2月28日（水）までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式は、<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/fellow.html>

からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

【申請書の提出先・問い合わせ先】

京都大学生態学研究センター共同利用担当 〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp Tel: 077-549-8200 / Fax: 077-549-8201

【京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ】

1. 生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
2. 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
3. 協力研究員の任期は原則として2年とする。

● センター関係者の動き ●

- 1) ABRAMS, Marc David 氏ーペンシルバニア州立大学（アメリカ）教授が特別招へい教員（特別招へい教授）として平成29年8月1日～平成29年11月30日まで滞在されました。
- 2) KARBAN, Richard 氏ーカリフォルニア大学（アメリカ）教授が特別招へい教員（特別招へい教授）として平成29年8月20日～平成29年11月19日まで滞在されました。

● NIE-CER joint symposium の開催 ●

2016年12月に韓国・国立生態院（NIE）と生態研（CER）が学術交流協定を結び、2017年9月10日～13日まで、生態学研究センター4名（中野、宇野、札本、永田）およびフィールド科学教育研究センター2名（小林、岩岡）、霊長類研究所2名（友永、川口）が韓国のNIE (National Institute of Ecology) を訪問致しました。

また、2017年12月9日には、NIEの研究者を招いて京都大学で第2回となる共同シンポジウムが開催されました。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員(一般)	9500円	○	○
正会員(学生)	6500円	○	○
賛助会員	年会費 20000円/22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・Ecological Research 8000円
- ・日本生態学会誌 600円**
- ・保全生態学研究 2000円**

**非会員に向けた学会誌(冊子体)の定期購読料は、以下の年額となります。

- ・日本生態学会誌 9,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

保全生態学研究は発行の2年後にオープンアクセスとなります。

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-5937-2721 Fax: 03-3368-2822